

孤独の海と銀ノ月

公開日

2015
04.26

登場人物

◎誰が為の桜か、

作家

：

とある小説家。

少女

：

作家の前に現れた白い髪をした少女

「彼」

：

作中作『誰が為の桜か、』に登場する人物。

◎水月ノ君

シユアン

：

母に愛されないことに苦悩する少年

白き少年

：

シユアンを海に呼ぶ白い髪に赤い目をした少年。

フーディエ

：

シユアンの母。シユアンを愛していないが、夜になると彼を求める。

リュウシン

：

シユアンの伯父。母に愛されないシユアンを不憫に思いつつも、傍観するだけ。

◎作家は海辺に立ち、海を眺めている。

作家
この海は不思議だな…… つい足を運んでしまう。
……ん？

◎突然海辺に強い風が吹いた。そして海面に人影が現れる……
その人影はこちらへと歩み寄ってきた。

少女 ……こんばんは
作家 君……（驚き）
少女 とても綺麗な月夜ね
作家 ……ああ、そうだね。 とても美しい、銀の月だ。

◎作家は月を見上げる。空で白銀の月が煌めいている。

少女 あなた、私と一緒にね。銀色の月の下で、真っ白に光る……
……ふふ、あなた、作家さんよね。知ってるわ。
私、あなたの書くお話がとても好きなの。
……へえ、君くらいの若い女の子でも、私の本を読むのかい。
少女 ええ。 特に好きなのは、こんな一文のあるお話よ。

作家 『誰（た）が為の桜か、それを知る者はない。ただ、桜は其処に在った。
その身を薄紅に染め、まるで誰かに恋するように。』
……!! 何故、それを……!?
少女 ねえ、このお話の続きは、書かないの？

◎波が静かに揺れている。

作家 ……君、何故その話を知っている？
それは、誰の目にも触れさせたことがない物語なのに
少女 ふふ……だって私、あなたの大ファンだもの。
ねえ、どうして書くのをやめてしまったの？

◎暫しの沈黙。

作家

…… あれは、ありきたりで安っぽい物語だからだ。

少女

本当にそう思っているの？

作家

……ああ。(少し迷いながら)

少女

でもあれは、あなたが本当に書きたいものではないの？

作家

あなたのお話は、いつだって寂しそう。そして、空っぽ。

少女

でもあれは違うわ。あなたの心が、はっきりと伝わってくるの。

作家

あなたの気持ち詰まっている……

少女

……

作家

教えてほしいの。あの物語で、あなたは最後に、何を伝えたかったのか。

少女

あなたのたった一つの言葉を、知りたいの。

◎強い風が吹き抜けていき、海が揺れる——……

◎『誰が為の桜か、』朗読。

少女

『誰（た）が為の桜か、それを知る者はない。ただ桜は其処に在り、丸い銀の月の下（した）で、その白い身体を晒していた。桜は、いつも彼を見下ろしていた。』

彼が桜に語り掛けると、その白銀の身体を、美しい赤に燃えあがらせてみせた。

それはまるで、恋する乙女のような、可憐な赤であった。』

「彼」

君は、とても美しいね。

少女

『彼は言い、桜の幹を撫でる。』

そうされると、桜は心の底から喜びが湧き上がり、その身をさらに赤く赤く染めあげた。

彼はそれを知ってか知らずか、慈しむように桜を見つめ、そして語り掛ける。

桜は、彼の自分に語り掛ける声に、紡ぐ言葉に、彼という存在そのものに、心を寄せていた。』

◎場面、作家と少女二人に戻る

少女

……白い身体を、「美しい」と言ってくれるなんて、彼はとても優しい人ね。

作家

……ああ。彼は、とても優しい男だ……

少女

だから桜は、彼に恋をしたのね。

作家

……君は、この物語の全文を覚えているのかい……？

少女

ええ、もちろん だって、このお話が大好きなもの。

作家

……。そうか……

◎再び『誰か為の桜か、』朗読。

少女

……『桜は、彼の住む街全体を見下ろせる、高い丘の上に在った。』

「彼」

彼は桜の幹に腰掛け、そこから街を見下ろすのを好いていた。』

少女

僕は、この街がとても好きなんだ。

「彼」

『「知っています」、と桜は答える。』

少女

桜の言葉は花卉（はなびら）となり、彼に降り注ぐ。

「彼」

花卉は彼に触れると薄紅に染まり、彼の身体を優しく撫でるように舞い落ちていく。』

少女

だから僕は、この街を、命に代えても守りたいんだ。

「彼」

『そう言う彼の表情はとても晴れやかで、美しかった。』

少女

桜は、ええ、そうでしょうね、と答える。

「彼」

舞い落ちる花卉は、どこか悲しげな色を帯びて彼に降り注ぐ。』

少女

ああ、見て御覧。今宵は月が美しいね。

「彼」

この銀の月は、君の姿をとて美しく見せる……

少女

『舞い落ちる花卉をふわりと掌に載せ、彼はそれに口付ける。』

少女

花卉は真紅に染まり、風に攫われてゆらりゆらりと舞っていった』……

◎場面、作家と少女二人に戻る。

少女 彼は、自分の住む街を愛しているのね。
作家 ああ、とても……
少女 だから、守りたかった……
作家 ……そうだ。(悲しそうに)
少女 このあと、彼は軍服を着て、桜のところに来るのよね。
作家 ああ……

◎「彼」台詞のみ『誰か為の桜か、』朗読。

「彼」 僕は、この街を守るよ。
君が見下ろすこの街が、いつまでも美しくあれるように。
僕の愛するこの街が、いつまでも清らかであるように。
僕は、この街を守ってみせる。

作家 桜は、まるで泣いているように花弁を散らした……

「彼」 ……ねえ、君は、待っていてくれるかい？
僕は必ず戻ってくる。そしてまた、ここでこの街を眺めよう。

作家 桜は……待っている、と答えた。
少女 でも本当は、行かないで、と言いたかったのでしょうか？
作家 ああ。……引きとめたかった。でも、できなかった。
少女 それは、どうして？
作家 怖かったんだ……。
自分に、彼を引き留められる力も、権利もないことを知ってしまうことが……

少女

『誰が為の桜か、それを知る者はない。ただ、桜は其処で待っていた。花卉が全て散り落ちても、吹雪に吹かれても、ずっと。』

ただ銀色の月を眺めて、たった一人、あの人を待ち続けていた。』

……お話は、ここまでで終わっているのよね。

……ああ。

その後（ご）、彼は帰ってきたの？

……。

ねえ、教えて。知りたいの。

……どうして、そんなに続きを知りたがる？

伝えたいから。

伝える？

たった一つ、心に秘められた言葉を、「彼」に。

……。そんなこと、できるわけないだろう。彼は、物語の中の、（動揺している）

ねえ、どうして隠してしまうの？（悲しい）

……君は、一体何なんだ？（怒っているようにならないように）

私は、あなたのお話が好きなだけ。だから知りたい、伝えたいの。

……（溜息） とんだお節介だね、君は……（苦笑しながら）

ふふふ ……ねえ、教えてくれる？

（溜息）。

……彼は、帰ってきた。桜の元に……

「彼」

嗚呼、今宵の月は、美しいね。

作家

『その日は、丸い銀の月が、空に浮かんでいた。』

銀の月は、彼の愛する街を見下ろしている。』

僕は、この街を守れたんだね。……良かった。

『安堵したような、柔らかな声。』

桜が想いを寄せ、長く待ち続けた、優しい優しい、彼の声。

銀の月に照らされたその身体は、ひどくぼやけて見えた。』

嗚呼、美しい……。 もう、思い残すことなど、何も無い……

「彼」

◎ 「彼」、月を見上げる。その身体は、うっすらと透けているように見える。

作家

『桜は、何も言えなかった。』

ただ、花卉を降らすだけだった。

何か言おうにも、散り落ちる花卉が邪魔をして、言葉を発せなかった。』

「彼」

……ねえ、君。

作家

『桜には、腕がなかった。
だから、崩れ落ちる彼の身体を支えることができなかった。
彼の身体は赤く染まり、顔は青白い。
彼はそっと桜に寄りかかり、囁く……』(言葉を詰まらせる)

◎場面、作家と少女二人に戻る。

少女

(暫く作家の言葉を待つ)。 ……？ 彼は、なんて言ったの？

作家

……(言葉に詰まっている)

少女

ねえ……？

作家

……彼、は……(苦しく、また、恥ずかしく、言葉を継げない)

少女

また、隠すの？

作家

……ッ

少女

良いじゃない。

それが真実ではなくても、そうあってほしいという願望でも、妄想でも、良いじゃない。
これがあなたの書きたかったものなのでしょう？

……あなたが、言われたかった言葉なのでしょう？

作家

……ははは…… 君には、何も隠せないんだね、私は……(苦笑)

少女

ええ、そうよ だから、観念して教えてちょうだい？

作家

……。

……桜は、ずっとそこに在り続けた。

毎日毎日、その花卉を散らして、銀の月の下で、ずっと——……

◎『誰が為の桜か、』朗読 続き。

作家

…：『月が欠け、再び満ちて、真円になったその日、桜は再び、彼に会う。そこは海辺だった。桜は、夢でも見ているのか、海の傍に在った。彼は海を中心に、月を背にして立っていた。』

そこで、彼はあの時桜に言った言葉を、もう一度囁いた。その言葉は、降り注ぎ続ける桜の花卉を攫って行く。』

◎ここから、物語と現実の境が曖昧になる。

海を中心に、「彼」が立っている。

作家モノログ、朗読よりも台詞に近い感じで。

「彼」

ねえ、君。

作家

波の音が聴こえる。静かで優しい、穏やかな音。まるで彼の声のような。

「彼」

…：待っていてくれて、ありがとう。

作家

強い風が吹き、潮が満ちていく。満ちゆく海は、彼の身体を溶かしていく。

桜には足がなかった。

だから、彼の傍に駆け寄って、彼を連れ戻すことができなかった。

桜には腕がなかった。

だから、あの時、彼を抱きしめることができなかった。

桜には声がなかった。

だから、伝えたいことを、伝えられなかった。

そう、思っていた。（「そう思っていた」、少し声を震わせて。）

作家

…：待って、ください…：っ！（泣きそうに、呼びかける。）

作家

気づいたら、叫んでいた。

海に溶けて、彼の姿がぼやけていく。

銀の月が、水面を照らす。

作家

いかないでください…：っ 置いていかないでください…：！！

◎作家、海の上を走って「彼」に駆け寄る。

少女
『あの時言えなかった言葉を。 本当に言いたかった言葉を。桜は彼に駆け寄る。 駆け寄って、彼の身体を抱きしめる。』

◎作家、溶けていく「彼」の身体を抱きしめる。

作家
私は、あなたを……っ！（言葉に詰まる）
少女
……どうしたの？
作家
……っ 私、は……っ（どうしても言えない）
少女
大丈夫。 ……あなたが伝えたかった言葉を、さあ……
作家
……っ ……無理、だ……
少女
どうして？
作家
私には、伝えられない……っ これ以上は……っ
少女
言ったでしょう？ 良いのよ、あなたの妄想でもなんでも今伝えないと、きっと後悔するわ。
作家
さあ、「あなたの物語」を、終わらせて……
作家
……っ……私、は……私……っ！
少女
大丈夫だよ、さあ、伝えて 彼に。
「彼」
大丈夫だよ、さあ、伝えて 僕に。

◎少女と「彼」のセリフ、重なる。

作家
私は、……あなたを、……（泣き出しそう）
少女
『彼の腕が、桜の身体を抱きしめ返す。とても暖かくて、優しい温もり。桜は、もう花弁を散らさない。 ただ声を張り上げて、叫んだ。』
作家
私は、あなたを……愛して、います……っ！（泣き叫ぶように）
「彼」
……僕もだよ。

◎作家の腕の中で「彼」が微笑む。そして、消えていった。

少女
『やがて彼の身体は完全に消え去り、桜は其処に、一人蹲っていた……』

◎穏やかな波の音が聴こえる……
作家は蹲って泣いている。

作家 ……っ…う…っ…っ (泣く)

少女 やつと、言えたね。

作家 ……ッ 私、は……っ

少女 あなたの、ずっと伝えたかった言葉。

少女 このお話は、あなたの「恋文」。

作家 彼に伝えたかった言葉を綴った、大切な大切な物語、でしょう？

少女 ……ありきたりで、安っぽい、つまらない物語だ……

少女 だから、書くのをやめたんだ……

少女 もう、隠さなくていいんだよ

作家 ……あなたの願いを、恥ずかしいなんて、思わなくて良いんだよ。

少女 ……

作家 ありがとう。教えてくれて。

少女 やつと、伝えることができたわ。

作家 (少し微笑む) ……君は、一体誰なんだい？

少女 私は、あなたのお話の大ファン。ただ、それだけよ。

作家 ……もう、行かなきゃ(寂しげに)

少女 行く？ どこへ……？

作家 還らないといけないの 海の底へ

少女 海の、底……

少女 そう。

作家 ……この海には、孤独な神様が棲んでいるの。

少女 孤独な心を感じ取って、その心を癒してあげようとするの。

少女 ふふふ、あなたの次のお話のネタにでも、どうかしら？

作家 ……じゃあね、作家さん。さよなら。

◎風が吹き抜けていき、その風に攫われるように少女は消えていなくなった……

作家 ……ああ。 ……ありがとう。

◎海が揺れる

作家 ……誰が為の桜か、それを知る者はない……ただ、桜は其処にありたいと願ったのだ……

ただ、愛しい人のそばに……銀の月の下(した)で、その白い身体を輝かせて……

◎作家、海の方へと歩いていく……

◎ひどく静かな夜。シユアンは、障子の隙間から外を眺めていた。隣で、一糸まとわぬ姿の母が深い眠りに落ちている。

シユアン 母上……

◎ふいに、耳元に海の波らしき音が届いた。

シユアン ? なんだ…… 波……?

少年 おいで……

◎見知らぬ声が聴こえた。

シユアン ! 誰だ?!
少年 おいで……僕のところへ、おいで……

◎声とともに、波の音がはっきりと聴こえ始める。

シユアン 呼んでいる、のか……?

◎恐る恐る立ち上がり、外へと出るシユアン。

少年 こっちだよ……

◎声に誘われるままに、歩くシユアン
やがて辿り着いたのは、海であった……

シユアン ……!

◎海辺には、一人の少年が立っていた。
真っ白な髪に赤い瞳をした、とても美しい少年であった。

少年 やあ、良い月夜だね。
シユアン ……俺を呼んだのは、貴方、か……?

少年
シュアン
少年

ふふ……待っていたよ。僕の声が、君に届く日を。
え……？
さあ、おいでよ。

◎少年は、シュアンに手招きをする。

シュアン

あ、貴方は一体……？

少年

僕が怖い？ この見た目は、君たちが嫌うものだから……

シュアン

白い髪に、赤い目……「忌むべき海の化物」……

少年

そう。僕は「化物」だ。「化物」故に、誰にも愛されない存在。

君も、僕を恐れる？

シュアン

……いや、……そんなことは……

少年

銀の月に照らされて、とても、綺麗だと思う……（少し照れる）

シュアン

ふふ……そう？ 君にそう言われると、嬉しいな。

少年

なぜ、俺を呼んだ？

シュアン

君の声が、聴こえたんだよ。「寂しい」って。

少年

……

君の心は、とても孤独に満ちているね。

シュアン

あまりにも孤独が深すぎて、君は、溺れてしまいそう……

少年

……そう、かも……しれない……

シュアン

その孤独を、癒してあげる

少年

癒す……？

シュアン

僕は君を愛している。だから、傍にいる。

少年

愛、して……（どきりと胸がときめく）

シュアン

さあ、おいで。……僕の愛しい、シュアン

少年

……

◎強い風が巻き起こる……！

◎静かな夜。シユアンと母・フリーディエは空を見上げている。
空には銀の月が浮かんでいる……

フリーディエ 今宵も、きれいな、月ねえ……

シユアン ……はい、母上……

フリーディエ お前が生まれたのも……こんな月夜だった……

銀の月が、真ん丸で、輝いていて……

どうして、……どうして、駄目だったのかしらねえ……（ぼんやりと、虚ろに呟く）

シユアン 母上……？

フリーディエ 私の大切な……あの子……嗚呼、まだ……一度も……腕に抱いて……いないのに……

シユアン どう、なさったのですか……？

◎心配そうに母の顔を覗き込んだシユアンを、フリーディエ、突然押し倒す。

シユアン 母、上……！

フリーディエ かわいそうな、わたしの子……

◎フリーディエ、シユアンの衣服を乱し、彼の肌に触れる。

母に触れられながら、シユアンは現実逃避のように、昨晚のことを思い返しはじめた。

シユアン どうして、俺の名前を知っている……？

少年 知っているよ、君のことなら、なんでも。

……なんて言うと、少し不気味かな

……この海の、御伽噺を知ってる？

シユアン 御伽噺？

少年 この海の底には、孤独な神様が眠っている。

神様の心は、孤独によつてバラバラになってしまった。

そのバラバラになった心の欠片が、君たちの言う「化物」……

……「忌むべき海の化物」は、神の一部だから、生まれたら海に還さなくてはいけない、と聞いたことがある。その御伽噺から生まれたしきたり、なのか？

多分、そうだと思う。

でも……海に還されても、神の孤独はどうにもならない。

一度零れ落ちた心の欠片は、一つの意味になって、消え去ることができなくなる……

君は……もう、海に還されたのか……

少年 シユアン うん。でも、君の声が聴こえたから、こうやって、ここで君を待っていたんだ。

意思になった欠片たちは、同じように孤独な者を見つけ出し、その心を癒してあげるんだ。君、いつも思っているよね。

寂しい、苦しい、……誰か、「愛して」って。

君が愛してほしいのは、……母親、でしょう？

シユアン

……つ

少年

僕もね、「おかあさん」に愛されたい。

シユアン

……君と一緒にだ。だから、君の声が聴こえた。

少年

そうか、君は……

少年

君は「化物」じゃないのに、愛されない。

シユアン

なんでだろうね？ ……悲しいね。（憐れんでいる感じにならないように）

少年

……母上は、いつも……いつも、「誰か」のことを、想っている……

少年

誰か？

シユアン

……毎晩、母は、俺と……（言葉を濁す）

少年

でも、俺に触れながら、いつもいつも、誰か別の人のことを考えている気がするんだ

少年

……へえ。（ちよつと意味深に）

シユアン

母上の心が誰に向いているのか、……ずっと、気になって……

少年

でも、知るのが怖いんだね

シユアン

……うん……

少年

知らなくてもいい真実、っていうものもあるよ

シユアン

知らないままのほうが、きつと、しあわせ

少年

……そう、かな……

少年

きつとね

少年

……ふふ、苦しいときは、いつでもおいでよ

シユアン

君の孤独を癒すために、僕はここにいるんだから。

少年

……

シユアン

僕が信用できない？

少年

……そういう、わけじゃ……

少年

そっか、良かった。

少年

……僕はいつでも、ここで君を待っているよ。

少年

だから、いつでもおいで……

◎場面、現在に戻る。

隣で眠る母にちらりと視線をやるシユアン

シユアン

母上……

◎悲しみを抱え、シユアンは外に出る……

◎海辺。少年は、シュアンの声を聞いている。

少年

聴こえるよ……君の声
泣いてる、君の心。……かわいそうに。

◎そこへやってくるシュアン。少年は、シュアンに微笑みかける。

少年

やあ、待ってたよ。

シュアン

……うん

少年

悲しい顔、してるね。 僕の傍に、おいで。

シュアン

……

◎シュアン、無言で少年の傍に行き、隣に腰掛ける。

少年

服が少し乱れているよ、(シュアンの服の乱れを整えてあげる)

……泣きそう、だね。

シュアン

……知らなくてもいい真実なら、目を背けていても、いいのだろうか……

少年

……(シュアンの言葉を待つ)

シュアン

知りたい、けど……知ったら必ず、傷つく……

少年

傷つきたくない…… 俺は、臆病だろうか……

少年

そんなことないよ 誰だって、傷つくのは嫌さ。

◎少年、シュアンを抱きしめる。

シュアン、抱きしめられて動揺する。

シュアン

……!

少年

身体、冷えてる。かわいそうな、僕のシュアン……

シュアン

僕が、温めてあげるね。(耳元でささやく)

少年

……君は、どうして、そんなに優しい……?

少年

それになんだか、懐かしくて……

少年

僕は、優しいかな? ……ふふ、そうだなあ……

少年

君を愛しているから、だよ。

シュアン

どうして、俺を……(泣き出しそうになる)

少年

君は僕と同じ。愛されたいのに、愛されない。

少年

だから僕は、君を愛する。

少年

……ねえ、君は、僕を愛してくれる?

シュアン

俺は……

少年

こういうの、傷の舐め合い、なのかな？

シユアン

でも、僕が君を愛して、君も僕を愛してくれたら、僕たちは、孤独ではなくなる。

少年

孤独では、なくなる……

うん。……ねえ、シユアン。

愛してるよ、ずっとずっと昔から。……きっと、生まれた時から……

◎少年、シユアンの耳元で甘くささやく

少年

だから君も、僕を愛して……

◎フリーデイエの夢。去っていく背中に必死で手を伸ばし、泣き叫びながら呼びかける。

フリーデイエ　お願い……連れていかないで……せめて、せめて、一度でいいからこの腕に……！
フリーデイエ　おねがい……お願いよお……っ！　私の、大事な、大事なその子を……！！
フリーデイエ　奪わないで……返してえ……っ！！！！

◎悪夢から目覚めるリュウシンが顔を覗き込んでいる。

フリーデイエ　……っ！
リュウシン　目覚めたか、フリーデイエ
フリーデイエ　……リュウシン、さま……（力なく）
リュウシン　ずいぶんと魘されていたが、悪夢でも見たのか
フリーデイエ　……わたしの、白雪が……溶けて、消えていく、ゆめ……
リュウシン　（溜息）……いつまでそのことを引きずるおつもりかな、貴女は……
フリーデイエ　いい加減、シュアンにも目を向けてあげてはどうかね
リュウシン　シュアン？（本気で不思議そうに）
フリーデイエ　いるだろう？　君が愛するべき子ども……
リュウシン　そんな子、知らない……　私のこどもは、あの子だけ……
フリーデイエ　……では、いつも貴女が共寝（ともね）しているのは、一体誰なのかな
リュウシン　……あの子……（恍惚として）
フリーデイエ　「あの子」は、もう海に、
リュウシン　っ！　あの子はどこに行ってしまったの?!　母に何も言わず……嗚呼、消えてしまう……
フリーデイエ　早く、早く見つけないと……っ!!（軽い錯乱状態）
リュウシン　……（溜息）。　哀れだね、本当に……
フリーデイエ　リュウシン様、あの子は、あの子は、どこ……？（泣き出しそう）
リュウシン　……。　私が探してくるから、貴女はゆっくり眠っていなさい。
フリーデイエ　でも……
リュウシン　必ず見つけ出そう。　私が信頼できないかね
フリーデイエ　……。　……分かりました……お待ちしております……

◎落ち着いたフリーデイエにうなずき、リュウシンは部屋を出る。

リュウシン　……残酷で哀れな母親だね、彼女は……

◎眩き、歩いていく……

◎夜、シユアンが家に帰ってきた。それを出迎えるリュウシン。

リュウシン ……お帰り。

シユアン ……！ リュウシン様、

リュウシン あまり夜遅くに出歩かないほうがいい。母上が心配しておられたよ。

シユアン ……母上は……

リュウシン ん？

シユアン 母上は、本当に「俺」を、心配しているのですか……？

リュウシン ……（何と答えるべきか迷う）

シユアン あ、……すみません……

◎悲しげな顔をして、シユアン、去っていく

リュウシン ……海の匂い。 ……海に、いたのか。

◎去っていったシユアンの残り香に「海」を感じるリュウシン

リュウシン あの哀れな子を、……「海の化物」は、求めているのだろうか……。

◎13年前。 リュウシンが、「忌むべき海の化物」を海に還したときのこと。リュウシンは赤子を腕に抱いて、海にいた。空には、銀の月が昇っている。

リュウシン

今宵は、……月が美しいな。

◎リュウシンは思い返す。

赤子を奪われ、錯乱し、泣き叫んでいたフリーディエの姿を。

フリーディエ

おねがい、リュウシン様……連れていかないで……っ！
お願い、お願いよう……っ！ せめて一度、この腕に抱かせて……っ！
どうして、どうして……こんなに美しい子なのに……！

リュウシン

白い髪と赤い目。……「忌むべき海の化物」は、海に還すがしきたり……
……しかし、あまりいい気分はしないな。

◎海へと近づき、腕に抱いていた赤子を水面におろす。

赤子はゆっくりと海に沈んでいく……

リュウシン

本来は母親がその手で還すべきなのだが……フリーディエのあの状態では……

フリーディエ

わたしの、赤ちゃん……かえして……おねがい、……おねがい……

◎泣いているフリーディエの姿が頭から離れない。

リュウシン

……彼女の、この赤子への陶醉はなんなのだろう。化物に魅入られたか……。
……遺された子が哀れだな。彼女の心が、不幸を呼び寄せねばいいが……

◎赤子、完全に海に沈む。

リュウシン

……還ったか。 許せ、これは古くからの決まりなのだ。
次生まれてくることがあれば、その時は……

◎強風が吹き、海が荒れる……

◎突然、フリーディエが錯乱し暴れはじめる。
窓ガラスが割れ、部屋中のものが音をたてながら落ち、壊れる。

シユアン
母上……?!
フリーディエ
あの子はどこ……あの子を、返して!!!!
シユアン
母上、どうなさったのですか……?!
リュウシン
どうした!?

◎リュウシン、慌てて部屋に入ってくる。部屋の中は荒れ果てていた。

シユアン
リュウシン様、母上が……
フリーディエ
嗚呼、嗚呼！ リュウシン様、あの子を返して!!
リュウシン
フリーディエ……!

◎暴れるフリーディエに覆いかぶさるようにして彼女を抑え込む。

フリーディエ
私の子ども……たったひとりの、私の子……?!
シユアン
母、上……（呆然として）
リュウシン
お前の子なら、そこにいるだろう！
フリーディエ
知らない……そんな子、知らないっ!!!!
リュウシン
私の子は、雪のように白い髪の毛、美しい子……?! 海に攫われてしまった、あの子だけ……!!!!
シユアン
フリーディエ!!!!
……っ!!!

◎シユアン、母のその言葉で察する。
母がずっと、自分に重ねて見ていた者。それが一体誰なのかを。

フリーディエ
どうして……リュウシン様……どうして、私の子を、奪ってしまったの……
リュウシン
あんなに美しい子を……どうして、殺したの……
フリーディエ
落ち着け、フリーディエ
その子は、誰……? どうして、どうして……あの子と同じ顔をして、私を惑わす……
フリーディエ
その子こそ、化物ではないの……?
フリーディエ
フリーディエ黙れ
リュウシン様、その子を……その悪いバケモノを、……殺して……
シユアン
その子がいたら……私は……あの子を思い出して、しまう……その子を、早く……
……母上……（ただ呆然と）
リュウシン
この子も、お前の大事な子だ。
思い出せ、あの時生まれたのは、双子だっただろう？

フリーディエ

違う……ちがう……っ 私の子は、真っ白な、綺麗な綺麗な子……
銀の月のように白くて美しい、たったひとりの、おとこのこ……

リュウシン

フリーディエ……（憐れみ）

フリーディエ

早く、早く……その子を、罰して……もう、私を惑わせないようにして……！
……。それでお前の、気が済むなら。

リュウシン

◎顔を覆って泣き崩れてしまったフリーディエを見て、諦めの溜息をつくリュウシン。
彼は立ち上がり、ゆっくりとシュアンの傍へと近づく……

シュアン

リュ、リュウシン、様……？（怯え）

◎リュウシン、怯えるシュアンを押し倒す。
その上に馬乗りになり、彼の衣服を乱していく……

リュウシン

よく見ている、フリーディエ お前と、私がこれから犯す罪を
決して目を逸らすな！

シュアン

お、おやめ、ください……っ！

リュウシン

……許せ、哀れな子。 さすがにお前を殺すわけにはいかないからな……

シュアン

リュウシン、さま……

◎悲しみと恐怖に襲われ、けれどこれも仕方がないことなのだと、シュアンは察し、
諦め、全てを受け入れるしかなかった……

◎すべてが終わり、空を見つめてぼんやり畳の上に横たわるシユアン……
そこに、少年の声が聴こえる。

少年 ……泣いてるね
シユアン ……君……
少年 全部、知ってしまったんだね
シユアン ……俺……心のどこかで、思ってた……
母上は、ほんの少しでも、俺のこと愛してくれてる、って……
母上の心にいる「誰か」のかわりだとしても……それでも……
少年 そう思っていないと、心が壊れてしまいそうだったんだね
シユアン ……でも、違った……母上は、俺の事なんて、はじめから……

◎シユアンの頬を、涙が伝っていく

少年 ……僕が、憎い？
シユアン わからない……今は、……君に、会いたい……
少年 ……おいで。
シユアン ……うん……

◎シユアン、ゆっくりと立ち上がり、外へ……
場面、リュウシンの部屋に。

障子の隙間から外を眺めるリュウシンと、その傍で一人楽しそうに笑うフーディエ。

リュウシン 「化物」が、彼を呼び寄せたのは……
フーディエ わたしの、子……かわいいかわいい、私の赤ちゃん……（楽しそうに。でも、狂っている。）
リュウシン フーディエ……満足、したか？
フーディエ ……ふふふ……隠れん坊しているのね……意地悪しないで……はやく出ていらっしやい……
（溜息）。 ……シユアン。「化物」、いや……片割れの傍に行くことが、
今君が得ることのできる、唯一の幸福なのかもしれないね……
フーディエ ……ふふふ……ほら、もう、母は降参します……早く、出ておいで……
リュウシン ……フーディエ 可愛い可愛い「君の子」を、呼び戻してあげよう。

◎リュウシン、フーディエの身体を布団の上に押し倒す。

フーディエ ふふふ、リュウシン様も、あの子に会いたい？
リュウシン そうねえ……あの子はとても、綺麗な子だものねえ……ふふふ、みんなあの子の、虜……
……私はあといくつ、罪を重ねれば良いのだろうか……

◎海辺にて。
丸い銀の月を背にして、少年は立っている。
シュアンは、そんな少年の傍に近づく。目から、涙が次々にあふれる。

少年
泣かないで。
シュアン
……止まらないんだ。
少年
ごめんね
シュアン
どうして、君が謝る？
少年
ずっと、黙っていたから

◎シュアン、少年に体を寄せる。
少年は、シュアンを抱きしめる。

シュアン
君は、暖かい……優しい、な
少年
君は、僕を、まだ優しいと思ってくれるの？
シュアン
……うん……
少年
君は、僕が憎くないの？
シュアン
……嫌い、と思うのが、普通なのかもしれない……でも、憎めない……
少年
……俺に、「愛してる」って言ってくれたの、……君だけだった、から……
シュアン……

◎少年、シュアンに口付ける。

少年
……僕はずっと、君を愛してるよ。君も僕を、愛してくれる？
シュアン
……うん 俺は、君を、愛する……そしたら俺、孤独じゃ、ない……

◎強風が吹き、海が荒れ始める。

少年
可哀想な、僕のシュアン。愛しい愛しい、僕の片割れ……
シュアン
……君に触れられると、不思議な気持ちに、なる……
少年
そのまま溶けてしまえそうな気が、する……
少年
……ねえ、シュアン
シュアン
……ん……なに……？
少年
僕の傍に、いてくれる？
シュアン
うん……
少年
……永遠に、離れないでいてくれる？
シュアン
……うん……

少年
シュアン

僕の愛しい可哀想なシュアン。この海の中で、融け合おう。
融け合う……？

少年

心の欠片を、どれだけ必死に集めて組み合わせても、完璧につなげることはできない。
ほんのわずかな空白が、そこかしこにあるんだ。

シュアン

その空白を埋めるには、「何か」が必要なんだ。……僕たち欠片は、その「何か」を探すために
孤独な人を求め続ける。……僕にとっての「何か」は、君だよ。

少年

……
ねえ、……一緒に、生きよう

シュアン

一緒に……？

少年

僕たちは、もともと一つだった。それが二つに分かれて、こんな風になってしまった。

シュアン

海の中で融け合って、一つになろう。そうしたら、僕たちは本当に一緒に生きられるし、
孤独でもなくなる。……「おかあさん」にも、愛してもらえる。

少年

……！
どうする？

シュアン

どう、って……

◎少年、立ち上がって海へ。

海の水面に立ち、シュアンにむかって手招きをする。

銀の月が、彼の姿を白く美しく照らし出した。

少年
シュアン

一つになってくれるなら、僕の手をとって……
……

◎シュアン、ゆらりと立ち上がる。

少年
シュアン

シュアン、愛してる。……さあ、おいで……
……俺……

◎シュアン、虚ろな目で、少年のほうへと歩き出す。

少年は静かに微笑んだ。

少年

一緒に生きよう。……僕たちは、「一つ」だ。

◎海が、すべてを包み込んでいく……

◎数カ月後……

フリーデイエは、腕に赤子を抱いて幸せそうに微笑んでいた。

フリーデイエ
リュウシン

ふふふ……可愛い可愛い、私の赤ちゃん……
フリーデイエ

◎リュウシン、部屋に入ってくる。

フリーデイエの傍に近寄り、腰を下ろす。腕の中の赤子を見る。
……赤子は、白い髪をしていた。

フリーデイエ
リュウシン
フリーデイエ
リュウシン

ああ、リュウシン様。見て、この子。私に笑いかけてくれるの。
……かわいい子だね。
ええ、とつてもかわいい……愛しい愛しい、わたしの赤ちゃん……
……

◎罪悪感に耐えきれず、部屋から出るリュウシン
襖の向こうから、幸せそうなフリーデイエの声が漏れ聞こえる。

フリーデイエ

ふふふ……可愛い。まるで雪のように真っ白な、私の赤ちゃん……
もう、私から離れては駄目よ……ずっとずっと、一緒。
ずーっと一緒に、いましょうね……

リュウシン

……海に還された魂は半身を求め、一つになった……
これが、あの子の唯一得られる幸福だったのだろうか……

◎リュウシンは苦悩する。

リュウシン

……今度は、愛してもらえるといいね、シュアン……

To be Continued.